

2023年12月10日 アドベントⅡ

説教題「平和の若枝」イザヤ書11章1～10節

主任牧師 加藤 誠

**「エッセイの株からひとつの芽が萌えいで／その根からひとつの若枝が育ち／その上に主の霊がとどまる」(イザヤ書11章1節)**

先週からアドベントが始まり、日曜日の午後に教育館の十字架塔に星の電飾が取り付けられました。夕方になり日が落ちて点滅し始めた電飾を見ていると、心に静かな喜びが広がるのを感じました。大井町駅前の光あふれるイルミネーションに比べたら、ささやかでシンプルな光であり、この世界を覆う暗闇に比べたら小さな光にすぎないのですが、「ほんとうの救い主の誕生を告げる星が今日も輝いている」こと自体が、確かな希望であることを示されるのです。星は何も語りません。静かにさやかに輝くだけです。しかし、その星の光を目当てに東の国の学者たちは救い主を探し出す旅を続けました。そして星が家畜小屋に生まれた赤ん坊のもとに導いた時、彼らの心は喜びにあふれたのです。どんな暗闇にも消えることなく、ヘロデ王の脅しに屈しない喜び。今日も星の輝きに神さまの希望の働きを見出す信仰をいただいきたいのです。

先週12月4日は、アフガニスタンで中村哲さんが凶弾に倒れて四周年でしたが、福岡では追悼集会が開かれ、ニュースで参加した一人の医師が紹介されていました。若き日にアフガニスタンの中村哲さんのもとに妻と小さな子ども二人を連れて一家で移住したものの、道半ばで挫折し帰国した方ですが、地方の診療所で中村さんの教えを胸に患者さんたちを誠実に診察している様子が伝えられていました。「一隅を照らす」。私たちは大きな光の働きはできなくても、社会の片隅を照らす働きはすることができます。自分の分限をわきまえ、自分の置かれたところで片隅を照らす働きを誠実に担っていく。そこに中村さんの星の働きが確かに継承されているのを感じました。

またアフガニスタンのタリバン政権は中学校以上の女子教育を中止していますが、首都カブールの地下学校では中村さんの働きを伝える絵本を題材に女子学生たちが話し合いをしている様子が報じられていました。そして日本の高校一年にあたる女子学生が「将来、建築技師になって中村さんのように人びとに希望を与えられる仕事をしたい」と語っていました。神さまが中村哲さんを通して起こされた働きは、今も人々の心を照らす灯であり続けていることに、心熱くされる思いがしました。

私たちの世界に荒れ野が広がっています。戦争、格差、差別、抑圧、虐待、飢え、破壊…。人のいのちや尊厳を踏みにじる力が毎日のように荒れ野を生み出しています。その荒れ野の前に「平和を祈ること」の難しさを感じます。祈る前にため息の方が大きくて、どう祈ったらよいのか。祈っても自分の言葉が上っ面だけのように思えて、言葉が続かないのです。ただそのように暗闇が広がる荒れ野において、どんなに小さく見えても、今日も、神さまの平和と希望の働きが続けられている。この世界の一番

低く暗い場所に生まれたインマヌエルの主がその働きを励まし続けておられる。聖書の確かなメッセージに励まされて、私たちがまた祈る者とされていきたいのです。

さて先週に続いてイザヤ書 11 章のメシア預言を取り上げました。「エッセイの株から新しい芽が萌えいで、平和の若枝が育つ！」という預言の言葉です。イザヤの時代、小さな国であるイスラエルは、エジプトとアッシリアという大国に挟まれて右往左往し、王たちがどちらの大国の庇護を受けることが得策なのかを毎日考えていた時にイザヤは主なる神への信頼を語りました。経済力でもない、軍事力でもない。主の霊に満たされたメシアが生まれ、2 節「知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊」に満たされたメシアが私たちに真の平和に導くと。

これらのイザヤの言葉で二つのことに心が留まります。一つは、イザヤが語る平和は「人が目にするところ、耳にするところ」によって立つのではなく、弱い人、貧しい人の声が「正当に／公平に」扱われる平和であるということです。王や貴族たち、権力や富を握る人たちに「都合の良い平和」ではなく、弱く貧しくされている人たちが心から喜べるような「神の平和」をイザヤは指し示したのです。そして、そのような「神の平和」を私たちの間に実現する救い主として、イエス・キリストは来てくださいました。今の日本も「直接の戦争はしていない」という意味では「平和」かもしれませんが、弱く貧しくされている人の声が「正当に／公平に」扱われているかという、とても「平和」とは言えない現実があふれています。この日本で、クリスマスに私たちはどのような「平和」を祈り願うのか。イザヤが語る「知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊」を求めていきたいのです。

もう一つ目に留まるのは「エッセイの株」という表現です。エッセイはダビデ王の父で、ベツレヘムという小さな村で羊飼いをしていた男です。その羊飼いの息子たちの中から不思議にもダビデという末息子が選ばれて、イスラエルの王となりました。なぜイザヤは「ダビデの株から」とは言わずに「エッセイの株から」と語ったのでしょうか。実はダビデの孫であるレハブアムが王位を狙った時、十部族の長たちが「エッセイの子よ、お前は呼びではない。家に帰れ！」（列王下 12 章）と罵倒したように、「エッセイの子」はダビデ王を軽んじて呼ぶ時の言葉でした。しかし、人びとによって軽んじられている「エッセイの株」からダビデという王を立てられた。そういう神の不思議な働きによって神はご自分の平和を実現されることをイザヤは語ったのでしょ。実際、ダビデ王の子孫たちは「ダビデ王」というブランドに依り頼んで王位を継承しましたが、その内実は見えない神への信仰を失った墮落でしかありませんでした。その王たちに、イザヤは「ダビデ王」というブランドに依り頼むのではなく、「エッセイ」という名もないところから働きを起こされる神さまへの信仰を求めたのです。「人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」（サム上 16・7）。目に見える力、富の見栄え良さに心動かされるのではなく、十字架の主にご自身の真実の愛をあらわされた神さまへの信仰を求めていきたいのです。